

## 論文 包装袋貿易から見た日本植民地期台湾の対アジア関係の変容

著者	平井 健介
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	51
号	9
ページ	2-28
発行年	2010-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00007081">http://hdl.handle.net/2344/00007081</a>

# 包装袋貿易から見た日本植民地期台湾の 対アジア関係の変容

ひら い けん すけ  
平 井 健 介

## 《要 約》

本稿では、日本帝国経済圏との関係の中で主に捉えられてきた台湾経済を再検討するため、包装袋貿易を取り上げ、台湾とアジアの関係の変容を考察し、以下の3点を解明した。

第1に、台湾のモノカルチャー経済は大量の包装袋を必要としており、米・砂糖を中心とする対日移出が拡大すればそれだけ、包装袋の対アジア輸入が拡大する構造にあった。第2に、輸入包装袋は当初は東アジアで利用されていた中国産包蓆が主であったが、製糖業における包装袋変更を受けて、次第に世界的に利用されていたインド産ガニーバッグへ移行した。こうした変化の要因は、いわゆる「食料原料基地」化による米糖生産量の増大の中で、台湾・中国間の包装袋需給バランスが崩壊したことにあった。

このように、植民地化において対日関係が強化されていく過程の中で、台湾とアジアとの関係は地域的な変化を伴いながら維持・拡大していたのである。

はじめに——台湾とアジア——

- I アジアにおける包装袋の生産と台湾のモノカルチャー経済
- II アジアにおける包装袋貿易
- III 包装袋変更の要因
- おわりに——結論——

は じ め に

——台湾とアジア——

本稿の主題は、日本植民地期台湾における包装袋貿易の考察を通じて、台湾の対アジア関係の変容を解明することである。

19世紀後半以降、欧米列強によって、いわ

ゆる「強制された自由貿易」体制が形成されると、アジア諸地域は欧米への一次産品輸出地域に再編されるとともに、アジア諸地域間で一定の経済的紐帯が見られた（本稿では、このような経済圏を「アジア経済圏」と呼ぶ）。台湾も例外ではなく、1863年以降、淡水・基隆・打狗・安平が次々と「開港」し、米・砂糖・茶・樟腦などが各地に輸出された。しかし、日本が、1895年の下関条約を嚆矢として、台湾を含む東アジアの国・地域を次々と植民地や租借地として組み込むとともに、これらの地域間で特惠関税地域を形成すると、アジア経済圏から離脱した日本帝国経済圏が形成された。すなわち、

20世紀前半のアジアは、日本帝国経済圏（日本・台湾・朝鮮など）とアジア経済圏（中国・東南アジア・インド）によって構成されることとなったのである<sup>(註1)</sup>。

台湾の対外貿易について言及した先行研究においては、米糖の対日移出局面、すなわち日本帝国経済圏との関係が重視され、アジア経済圏との関係（輸出入）については正面から取り上げられることはほとんどなかった。なぜなら、台湾の役割は日本の正貨流出を抑制するための米糖対日移出にあり、輸出入貿易は、日本の関税政策を受けて、移出入貿易に代替される形で推移し、貿易全体に占める割合が低かったからである。近年、こうした認識に対して、台湾とアジア経済圏との関係を議論する研究が進められている。第1は日本植民地化前後の連続面を重視して、対中国関係の推移を議論する研究である。林満紅は、台湾交易における主要相手先であった華南地域との関係は人的交流を伴いつつ絶対額では決して縮小していなかったことを指摘し [林 1997]、許世融は台湾・華南関係を変化させた要因が日本の関税政策のみにあったわけではなく、日貨排斥運動・銀価格の変動・航路などの非関税要因および密貿易も重要であったことを指摘する [許 2005]。第2は、日本植民地化以後に対アジア経済圏との関係が拡大した点を指摘する研究である。すなわち、日本植民地化後に拡大した包種茶貿易は、台湾商人によって担われ、東南アジア華僑の需要に依拠していたことが明らかにされている [河原林 2003；松浦 2003]。

このように、日本との関係だけでは捉えられない側面もあることが明らかとなったが、これらの研究では、日本植民地期台湾をめぐる移出

入部門（日本帝国経済圏）と輸出入部門（アジア経済圏）が個別に考察されている。したがって、台湾全体から見れば、輸出入部門が移出入部門とは「別のメカニズム」で展開していたという消極的な評価は免れない。残された課題は、移出入部門と輸出入部門を横断的に考察し、これらがどのような関係にあったのかを解明することで、台湾貿易における対アジア経済圏との関係をより積極的に位置づけることであろう。

その際、移出経済の中心に位置した製糖業・米穀業が需要する商品（「米糖関連商品」、以下、括弧略す）は格好の分析対象となる。なぜなら、甘蔗や米の栽培に投入する肥料、製糖・精米段階で必要となる各種の機械類、製糖工場の建設に必要とされる物資、そして、生産された商品の輸送を支える包装袋といった米糖関連商品のうち、肥料や包装袋は恒常的に必要な商品であり、主に輸入に依存していたからである<sup>(註2)</sup>。肥料輸入については、堀和生の研究が挙げられる [堀 2009]。堀は、日本以外との貿易は1920年代までは増大する局面も見られたこと、米糖移出の増大を支えた肥料が満洲やヨーロッパから輸入されており、「日本以外の貿易関係は、その日本台湾間の経済関係を支えるという位置づけになっていた」とし、台湾貿易構造において移出と輸入を関連付けた数少ない研究である。ただし、満洲は純粋な輸入貿易というよりも日本帝国経済圏における地域間関係の緊密化と解釈できる。本稿では日本帝国圏外から輸入された包装袋を取り上げ、台湾の移出経済にとってアジア経済圏はどのような意味を持っていたのかを明らかにしたい。

食品包装学において、包装は、商品の変敗防止と品質の保持、微生物やごみなどの付着防止、

商品生産の合理化と省力化、流通・輸送の合理化と計画化において重要な商品であるとされる[芝崎・横山 1993]<sup>(註3)</sup>。すなわち、包装は、商品生産・流通・消費の全ての局面で重要な役割を果たしていたのであり、歴史的に見ても、包装袋は商品の輸送と質に影響し国際競争力を左右していたか<sup>(註4)</sup>、従来の経済史研究では包装される商品に焦点が当てられるあまり、包装袋そのものが重視されることはなかった。しかし、杉原薫は「アジア間貿易」論の中で、包装袋の重要性について触れている。杉原は、アジアの対欧米貿易およびアジア域内貿易の拡大につれて、ジュート袋の需要が拡大したことを指摘し、ジュート工業を有しないアジア市場ではインド産ジュート袋の地位はほとんど独占的なものとなったとする[杉原 1996, 198]。ここでは、ジュート袋が他の一次産品・工業品とは異なり、それらの増大を支える商品として扱われている。つまり、包装袋の安定的な供給なしに貿易の拡大は不可能であり、それは台湾にとっても例外ではない。

以上の点を踏まえて、本稿の第1の課題は、包装袋貿易から見た台湾の対アジア経済圏関係の変容を解明することである。課題の解明に当たり、上述した杉原の指摘に加え、以下2点に留意する。第1に、インド産ジュート袋は、確かにアジア市場において重要な役割を担っていたが、東アジアにおいては、中国広東省で生産される包装袋である包蓆<sup>ほうせき</sup><sup>(註5)</sup>もまた需要されていたことである。特に中華圏に位置した台湾においては、古くから包蓆の方が圧倒的に需要されており、包装袋貿易の考察に包蓆は欠かせない。第2に、台湾では、インド産のジュート袋(ガニーバッグ=gunny bag)<sup>(註6)</sup>に加え、日本や

台湾で生産されたガニーバッグの利用が見られたことである。以上の点に留意しながら、包装袋貿易を考察し、植民地化前後の関係、アジア経済圏における台湾・中国・インド間関係、アジア経済・日本帝国経済間関係といった様々なレベルでの関係の変遷を議論していく。

第2の課題は、地域間関係が変容する要因を解明することである。本論で考察するように、台湾で使用される主要包装袋は包蓆からガニーバッグへと移行した。それは、各製糖会社によって自主的に、または台湾製糖業のカルテル組織である糖業連合会によって強制的に行われた。しかし、そもそも包装袋の需要者にとって、包装袋取引は直接利益をもたらすわけではない。また、コストの側面から見ても、包装袋は大きな部分を占めていない<sup>(註7)</sup>。そうであるならば、包装袋の種類が移行していく背景には一体どのような要因があったのだろうか。また、包装袋の変更は台湾経済におけるどのような変化を示しているのだろうか。本稿では、糖業連合会史料などの分析を通じて、この問題を解明していく。

## I アジアにおける包装袋の生産と台湾のモノカルチャー経済

### 1. アジアにおける包装袋の生産

#### (1) 包蓆

砂糖用包蓆の産地は、広東省雷州府(民国期以降、海康縣)である。包蓆の原料は、広東省では「竹仔」と呼ばれる蘭草<sup>いぐさ</sup>の一種であり、湿地を適地としたため、雷州府では、水はけの良い高地においては米が生産され、湿地の多い低地には蘭草が生産されていた[忍頂寺 1918, 17]。第一次大戦期までの蘭草の生産は、かな

り粗放的であった。たとえば、蘭草の植付は根分け法であったが、植付時期は一定せず、蘭草が5～8尺ほどに成長した際（約1～2年）に収穫するといった具合であった〔台湾総督府殖産局 1921, 6〕。また、栽培に際して、明治末期に雷州半島で蘭草の栽培を視察した前田吉次郎は「人糞尿及豆粕を適肥とすと言ふも原産地に於ては實際施肥するものあるを聞かず」と報告している〔台湾総督府殖産局 1921, 7〕。しかし、第一次大戦期から大戦後にかけての包蓆価格の上昇は、蘭草生産に変化をもたらした。施肥においては、台湾総督府（1918）によれば「近年（蘭草の一引用者注）需要著しく増加したる為め之を穀類の収穫少き地方に移植し排出物肥料を施し積極的に栽培を為すものあるに至れり」とあり、広東帝国領事館の報告によれば「植付及刈入には一定の時期あり。極付後約四ヶ月位にして肥料を施す肥料は普通豆粕或は人糞尿を用ひ」るようになった〔外務省通商局 1923, 40〕。また、米から蘭草への作付け転換が行われるようになった〔陳 1965, 72〕。ただし、蘭草の生産に適した低湿地の面積は限られており、作付面積にも自ずと限界があったとされる。雷州府における包蓆の製造は、包蓆商によるものと農民の家庭内副業によるものの2種類に分かれていた。包蓆商が主導する場合、彼らは原料の収穫時期に生産地へ店員を派遣するか代理店を通じて原料を購入し、自前の職工（多くは農民）や近隣の農民に一定の工賃を支払って製織させた。ただし、大部分は家庭内副業として行われていた。家庭内副業の場合、農民は、自ら栽培した蘭草または市場において購入した蘭草を農閑期や雨天及び夜間に包蓆に製織し、各地で開かれる定期市において販売した。

包蓆の生産に当たり、織機が用いられることはなく、組合も存在しなかったため、包蓆は規格及び品質の統一が困難であったとされる〔外務省通商局 1923, 40〕。

## （2）ガニーバッグ

ガニーバッグの原料である黄麻は、インドのベンガル州、ガンジス川及びブマプトラ川流域の沖積層地方で生産され〔三井物産株式会社大連支店伊達正男 1921, 7〕、2～3月頃に播種が開始されて6～7月頃には収穫を迎える。農民によって生産された黄麻は各地で開かれる定期市場において産地商人（first seller）に販売された後、カルカッタの製麻工場（jute mill）でガニーバッグに加工され、加工されたガニーバッグは土着のブローカーを介して輸出業者に販売された〔三井物産株式会社大連支店伊達正男 1921, 12, 41〕。製麻工場のほとんどはスコットランド人によって経営されており、各社によって製麻工場組合が組織され、組合員の利益が図られた〔三井物産 1920, 5〕。製麻工場では多くの女子・児童労働を含むインドの低賃金労働力が不断に供給され、したがって各種ジュート製品は強い価格競争力を有していた〔杉原 1996, 198, 200〕。その結果、工場数は19世紀末に31、1913年に60、1923年には86と増大し、機械台数は同じく1.1万台、3.3万台、4.8万台へ、鍾数は24.4万鍾、69.1万鍾、100万鍾へと飛躍的に拡大した〔商工省商務局貿易課 1925, 折込表第2〕。各工場で生産されるガニーバッグは、中国における包蓆と同様に、多くの規格があったが、包蓆と異なるのは、工場制機械工業による大量生産が可能であったことであり、規格統一や品質の維持に対する厳格化が図られていたことである。また、製麻工場組

合の規定により、取引をめぐる問題はベンガルの商業会議所の裁定によって解決されることとなっており、賠償金の制度もあった〔三井物産 1920, 25〕。

## 2. 台湾の米糖モノカルチャー経済と包装袋

17世紀に多くの漢人が対岸から台湾へ入植して以降、台湾は米糖モノカルチャーを中心とする経済になった<sup>(注8)</sup>。それは日本植民地化以降も大きく変化せず、むしろ台湾が日本の「食糧原料基地」と化すことで、より一層強化された。台湾における米穀生産の中心は中部である。台湾米の主要販売先は島内市場であり、移出を目的とした蓬莱米の生産が活発化する 1924 年以前の移出率は 10～20 パーセント、1924 年以降においても 30～40 パーセントであった。島内市場へ販売される米は、各農家で生産される麻袋に包装されて販売されたが、日本へ移出される米は、基隆・高雄港においてガニーバッグに再包装され移出された〔台湾銀行調査課 1922, 44〕。一方、農業生産額の多くを占める砂糖生産の中心は中南部、主に南部一帯である。毎年 11 月になると中南部の各地でサトウキビの収穫が開始される。サトウキビは、歩留の関係上、伐採後すぐに製糖工場へと運ばれ、製糖作業に入らなければならない。サトウキビ伐採および製糖作業は翌年 5 月までは休みなく続けられる。製糖工程の最終段階が包装作業である。大量に生産された砂糖は包蓆に包装され〔亀井 1914, 42〕、縦貫鉄道に乗って港まで運ばれ日本へ移出されていった。米および砂糖の合計移出量は第一次大戦前夜に約 400 万担、1920 年代前半には 1000 万担、1920 年代後半には 1500 万担の巨額にのぼり、港の倉庫内がこれらの商

品を包装した包装袋で溢れかえる風景（写真 1）は、米糖モノカルチャー経済を中心とする台湾の象徴的なものと言える。

ところで、台湾の製糖会社各社は 1910 年に糖業カルテルとして糖業連合会（以下、連合会と略す）を結成した。日本植民地化以後、日本の砂糖需要に応えるため、台湾における砂糖生産量は急激に増大し、早くも 1900 年代末には、日本の直消糖<sup>(注9)</sup>市場において供給過剰問題が発生した。連合会は供給過剰がもたらす糖価下落を防ぐために設立され、各社の砂糖供給量を交渉する場として機能したほか、船舶会社との船賃交渉、また政府に対して関税・消費税に関する陳情を行う中間組織として機能していた。したがって、連合会における議題も、産糖処分協定、船舶運賃協定、陳情が多くを占めた〔久保 2009〕。

こうした中、1924 年 7 月 14 日の第 354 回協議会において、突如として「来期産直消糖包装麻袋の斤量並に島内消費の包装に関する件」が議題として提出され、

「①大正 13 年 11 月以降の台湾産糖中二種分

写真 1 高雄港内の倉庫に高く積まれた砂糖包装袋



（出所）仲摩（1931, 361）。

蜜直消糖の包装は150斤入り麻袋（ガニーバッグ）とし絶対にアンペラ（包蓆）を使用せざる事但し台湾に於ける一種糖二種糖車糖耕地白糖並に内地精製糖の包装は之れを自由とす。

②台湾東海岸諸工場に於ける産糖に関して荷役の関係上135斤入を様認するものとす。

③前二項に違背してアンペラを包装に使用せしものある時は、1担につき金1円也の違約金を徴収するものとす。」

ことが決議された〔糖業連合会 1924b〕。すなわち、従来から砂糖包装用として利用されていた包蓆の使用を中止してガニーバッグを使用することとし、違反者に対しては1担につき1円の罰金を徴収することが決議されたのである。連合会の決議に対して、砂糖需要者である糖商組合及び製菓組合は即座に反対の意を表明したため、その後、連合会の中心的な議題は、産糖処分協定などではなく、包装袋変更に関するものとなった。反対の意を表明したものは、主に、大阪糖業組合・東京砂糖貿易商同業組合・関門糖粉組合・名古屋砂糖貿易商組合といった、台湾糖移入港の糖商組合であった。また、地方の砂糖組合として長野県糖商連合会・岡崎市砂糖商組合、製菓組合として長野県菓子業組合連合会・長野県菓子協会からの請願が確認できる。製糖会社からの請願書は、台東製糖及び塩水港製糖の花蓮港工場といった、台湾東部の製糖工場からのものである〔糖業連合会 1924c, d, e, f, g, h; 糖業連合会 1925a, b, c, d, e〕。主な反対理由は、品質に関するものであった。第Ⅲ節で詳述するように、藎草と黄麻は繊維の性質上大きな違いがあり、前者は後者に比して、毛

屑が出にくく湿気に強いという、食品包装において決定的な優位性を有していた。砂糖の需要者である糖商や菓子製造者は、包装の変更に伴う取引上の紛糾を予見し、連合会の決定に頑なに反発したのである。包装袋変更問題をめぐる事態は深刻化し、当時の殖産局長片山三郎が1925年7月16日、連合会台湾支部に対して、「貴会に於て本期甫めて採用せられたる直接消費糖の麻袋包装に付ては其成績略判明候義と存候条取引上の便否砂糖に及ぼす影響等調査の上御回報相成度尚ほ一般需要者並に糖商側の概評をも併せ承知致度追て来期に於ける包装見込御通知相成度右及照会候也」〔糖業連合会 1925d〕

と通知するほどであった。しかし、殖産局をも巻き込んだこの問題は、連合会が変更決定を強行したことで終結し、連合会の議題も、第378回を最後に、1927年関税改正の問題へと急速に移行していった。この突如として巻き起こった、食品包装の観点からすれば改悪とも言える包装変更は、台湾にとって一体どういう意味を有していたのだろうか。

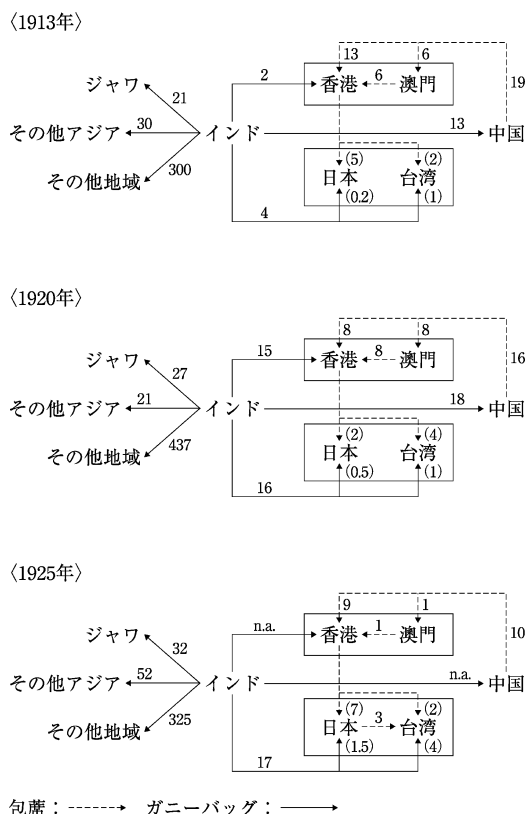
## Ⅱ アジアにおける包装袋貿易

### 1. 包装袋の貿易

#### (1) 各種包装袋の貿易量

図1は、アジアにおける各種包装袋の貿易について、100万袋以上の貿易量を持つ環節を示したものであるが、最初に以下3つの点を断っておく。第1に、本稿の主旨である砂糖・米用の包装袋貿易のみの動向を統計から把握することは困難であるという点である。包蓆については広東省の拱北（Lappa）海関から澳門への輸

図1 アジアにおける包装袋流通量 1913・1920・1925年（100万袋）



（注1）包蓆：「中国→香港・澳門」は、CIMCの“Bag of all kinds”および“Mat”の項目を用い、「香港・澳門→日本・台湾」は、東洋経済新報社（1935,336）、及び台湾総督府『台湾貿易概覧』（各年）を用いて算出した。包蓆は2枚を用いて1袋とするため、各統計記載の数字（“Bag of all kinds”は除く）を2で除した。

（注2）ガニーバッグ；インドからの輸出は、DCISIの“Bag of Sacking”の項目を用いた。1913年は「各地域への輸出量＝総輸出量×（各地域への輸出額÷総輸出額）」で推計し、算出した。日本・台湾側の統計は東洋経済新報社（1935）である。ただし、日本に関する数字は1911年以降、単位が担（60キロ）に変更されるため、統計に記載の数字に60を乗じた（ガニーバッグ1袋は約1キロ）。「日本→台湾」は台湾総督府民政部財務局『台湾貿易概覧』（各年）を用いて算出した。

（注3）1925年の「その他アジア」には、中国と香港を含む。

出が主に砂糖用であることが判明するが、ガニーバッグについては用途が不明である。したがって、本図では全ての用途に対する包装袋の貿易量を取り上げている。第2に、輸出側の作成した統計の数字と輸入側が作成した統計の数字が一致しないという問題である。とりわけガニーバッグに顕著であり、インド側の統計において日本・台湾向けの輸出量は1000万袋単位であるが、日本・台湾のガニーバッグ輸入量は100万袋単位となり、かなりの開きがある。こうした問題は、輸出手続きを経た商品の包装に用いられる場合、その包装袋は輸入として計上されないという点から生じると考えられる<sup>(註10)</sup>。したがって、輸出量を用いるのが妥当であるが、ここに香港における中継貿易の存在が問題となる。周知の如く、香港の貿易量を知ることは不可能であり、ほとんどが香港へ直接・間接に輸出された包蓆がどこへ輸出されたのかは分からない。以上から、包蓆については中国から香港・澳門への輸出量は中国側統計の輸出量を用い、澳門へ輸出される包蓆は全て香港へ再輸出されると仮定した（この妥当性については後述）。そして、香港から日本・台湾への輸出量は日本・台湾側統計の輸入量を用いた。ガニーバッグについては、インド側統計の輸出量と日本・台湾側統計の輸入量を併記した。日本・台湾側統計の数字には括弧を付記して見分けがつくようにしている。第3は、時期の問題である。ガニーバッグの統計において、アジアへの輸出先が把握できるのは1925年までである。そこで、第一次大戦前夜の1913年、大戦特需・船舶不足が終結した1920年、そして1925年を取り上げた。

以上の点を考慮して、さきに各包装袋の流通



形態について確認しておく。まず、包蓆であるが、雷州半島で生産される砂糖用包蓆の集荷に当たっていたのは、雷州商人であった。雷州商人は、各定期市または直接農家に赴いて種々の包蓆を買い付け〔外務省通商局 1923, 40〕、これらの包蓆を一部国内に輸送したほか、大部分は拱北海関から澳門へ輸出した<sup>(註11)</sup>。したがって、澳門向けが砂糖用、香港向けは広東付近で生産される生糸・茶用の包蓆であったと考えて良い。澳門から砂糖用包蓆を輸入した香港の包蓆商は、市況や外国商人の要求に応じて雑多の包蓆を分別するのみならず、必要であれば加工し、外国商人に販売した。香港からの輸出先は不明であるが、包蓆需要の多くは日本であり、第一次大戦後における日本・台湾向けは供給量の7割を占めるほどであったという〔陳 1965, 72〕。台湾・日本への主要な輸入商は、当初は昌隆號（香港商人）の独占であったが、1910年代には三井物産・鈴木洋行・大澤洋行・湯浅洋行が台頭し〔台湾農友会 1914, 184〕、1920年代には瑞香園などの香港商人、陳中和などの台湾商人も加わった〔三井物産香港支店長 1926, 33〕。特に瑞香園の取扱量が多く、三井物産や鈴木商店が次いだ〔三井物産台南支店長 1926, 129-130〕。次にガニーバッグについて見てみよう。ガニーバッグの最大の輸出港はインド東部のカルカッタである。カルカッタのガニーバッグ輸出商は製麻工場または仲介者（banian<sup>(註12)</sup> broker）を通じてバザールからガニーバッグを購入し、世界各地へ輸出した。アジアが占める比率は1913年及び1920年で20パーセント弱、1925年で25パーセントに過ぎなかった。アジアについて見れば、ジャワへ主に砂糖用、その他アジア（主にインドシナ）へは主に米用のガ

ニーバッグ、東アジアへは多用途のガニーバッグが輸出された。輸出商は、欧米商人とともに三井物産も主要な地位を占めていたが、ガニーバッグが世界中に輸出されていたため、三井物産のガニーバッグ取引の90パーセント前後は第3国間取引であり、輸取引の比率は低かった〔三井物産『事業報告書』〕。台湾向けについては、三井物産・鈴木商店・安部商店が主に取り扱いしており〔三井物産台南支店 1926〕、三井物産は台湾のガニーバッグ輸入量の70パーセントほどを占めた〔三井物産台南支店 1926, 168；台湾総督府『台湾貿易概覧』各年〕。

以上を踏まえて、図1からアジアにおける各種包装袋の貿易規模の変遷を考察しよう。1913年の包蓆の輸出量は1900万袋、ガニーバッグの輸出量は7000万袋であり、ガニーバッグが約80パーセントを占めていた。しかし、ガニーバッグ輸出の約70パーセントは東南アジア向けであり、したがって、東アジアでは両袋は拮抗（ともに1900万袋）しており、東アジアにおける包蓆需要の高さを読み取ることができる。なお、1910年代前半における雷州産包蓆の仕向先は、華北・上海向け塩包装用200万枚、東京（トンキン）米包装用50～60万枚の合計260万枚（130万袋に相当）、日本・台湾向け400～500万枚（200～250万袋に相当）であった〔台湾農友会 1914, 184〕。次に、1920年における貿易量を見ると、包蓆輸出量は1600万袋と若干減少する一方、ガニーバッグ輸出量は9700万袋へ増大した。当該期のガニーバッグ輸出の特徴は、東アジア向けが増大したことであり、東南アジア向けが停滞・減少しているのに対し、東アジア向けは4900万袋へ約2.6倍増大した。日本・台湾へ輸入されるガニーバ

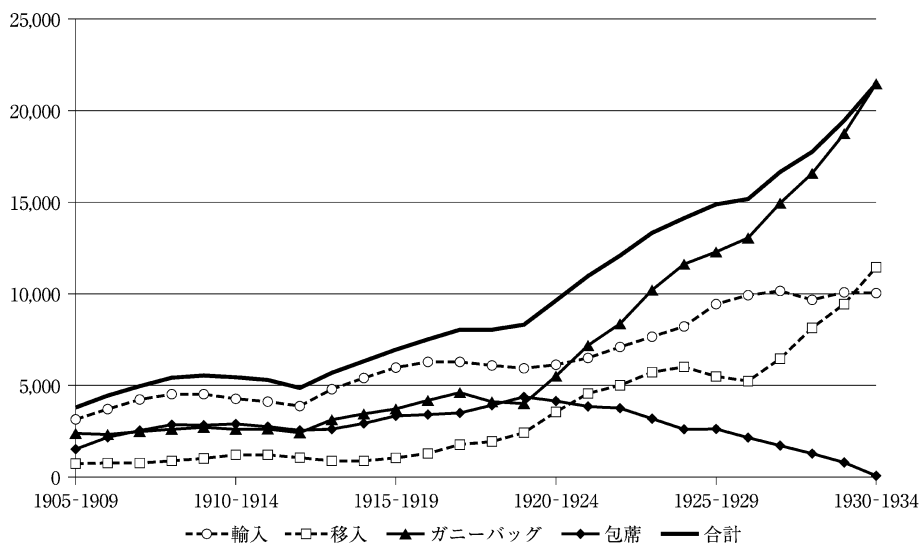
グの一部が香港を経由されていたことを考えると、日本・台湾における需要の増大を窺うことができる。第一次大戦を境として、東アジアにおける包装袋需要構造が大きく変化したと言えよう。最後に、1925年の動向を見ると、包蓆輸出量は1000万袋へさらに減少したのに対して、ガニーバッグ輸出量は1億袋を突破した。東アジアへの輸出量に関して、中国・香港への輸出量は史料の関係上明らかにしえないが、中国・香港を含む「その他アジア」が急増したことを考えると、当該期に東アジアにおける包装袋需要の中心がガニーバッグとなったことは想像できよう。そして、包蓆輸出の中でも、香港へ直接輸送される茶・生糸用は減少していない

のに対して、澳門を経由する砂糖用が顕著に下落していることから、砂糖用の動向が東アジアにおける包装袋需要構造の変化の要因であったと言える。

## 2. 台湾の包装袋貿易

図2は、1905～29年における台湾の包装袋貿易量を種類別及び輸移入別に示したものである。図から、当時の包装袋貿易を3期に区分することができる。すなわち、第1に、1905～16年における包蓆の輸入が増大する時期、第2に1917～23年における包蓆・ガニーバッグがともに増大する時期、第3に、1924～29年におけるガニーバッグ輸入が増大し包蓆輸入が下落

図2 台湾の輸移入別・種類別包装袋輸移入量（1000袋（100斤入り））  
1905-1929年5カ年移動平均



(出所) 台湾総督府財務局『台湾貿易年表』各年。

(注1) 包蓆輸入量は高雄・安平の輸入量である。基隆に輸入されるものは多くが茶用と考えられる。

(注2) 輸入包蓆は2枚を合わせて1袋となるため、原表輸入量を2で除して100斤入り袋の枚数とした。

(注3) 輸移入ガニーバッグ（中古品含む）は150斤入り袋のため、原表輸移入量に1.5を乗じて100斤入り袋の枚数とした。

(注4) 図中の数字には中古も含む。

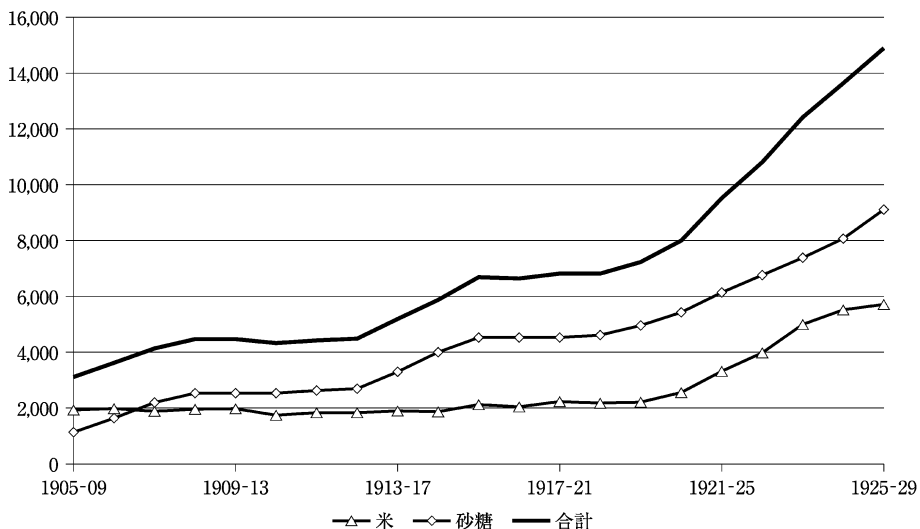
するとともに、移入量の増大が顕著に見られる時期である。以下では、包装袋が主に使用された米糖移出量の推移にも触れながら、各時期の包装袋貿易と輸入代替化の動向について考察していく。

#### (1) 1905～16 年

まず、包蓆・ガニーバッグが包装袋として使用された米糖移出量について考察しよう。図3は1905～29年の米糖移出量を示している。図を見てみると、1905～09年平均で312万担であった米糖移出量は、1912～16年平均で453万担へ約1.5倍に増大したことが分かる。増大の多くは、砂糖移出量に依拠している。すなわち、各製糖会社の設立を受けて、甘蔗収穫面積が約5倍、製糖能力が約20倍に増大したことにより〔台湾総督府殖産局特産課 1936, 1；山下 1932, 130-135〕、砂糖移出量は、1905～09年平均の117万担から1912～16年平均の約270万担へと増大した。台湾で生産された砂糖の種類

は、赤糖・直消糖・原料糖<sup>(註13)</sup>・白糖に区分でき、原料糖と白糖は1910年代に入ってから生産が開始された。1912～16年平均の各種砂糖移出量は、赤糖22万担、直消糖112万担、原料糖124万担、白糖11万担であった〔台湾総督府財務局 1936, 504-507；山下 1932, 12〕。次に、米の移出量は1905～09年平均の195万担から1912～16年平均の約183万担へと若干の減少を見た。これは、当該期の台湾米はインディカ米であったため、ジャポニカ米を嗜好する日本では、あまり需要されていなかったことによる〔大豆生田 1993〕。砂糖・米の包装に用いられた包装袋は、砂糖の包装は包蓆、移出米の包装はガニーバッグであった。包装袋輸移入量は1905～09年平均の379万袋から1912～16年平均の491万袋へと増大した(図2)。種類別で見ると、包蓆は砂糖増産を受けて146万袋から250万袋へと約2倍増大する一方、ガニーバッグは米移出量が伸びなかったため、233万

図3 台湾の米糖移出量(1000担) 1905-1929年5カ年移動平均



(出所) 台湾総督府財務局 (1936, 491-493, 504-507)。

袋から 241 万袋へとほとんど増大しなかった (図 2)。

次に、輸入代替化について考察しよう。包蓆の輸入代替化は台湾で進められた。1902 年に糖業育成政策が植民地経営の中心に据えられると、台湾総督府は包装袋需要が増大することを予測し、包蓆の輸入代替化を開始した [台湾農友会 1912, 25]。まず、1902 年に中国における栽培状況を調査するとともに、種苗を輸入し、総督府農事試験場において試作した [台湾総督府殖産局 1921, 3-4]。その後、嘉義在住の前田吉次郎が自ら雷州半島に赴いて種苗を輸入し、嘉義の山仔頂にある 7 坪の土地を利用して、移植を開始した。さらに、1912 年、総督府殖産局が海南島在住の勝間田善蔵の斡旋を受けて 480 斤 (8000 株) の種苗を輸入し、台湾各地 9 カ所に配布した。主な配布先は、総督府農事試験場 (1000 株) や大目降糖業試験場 (1019 株)、各地の農会農場 (3887 株) であり、前田吉次郎農場にも 430 株が配布されている [台湾総督府殖産局 1921, 4-5]。ただし、農家への配布は進んでおらず、第一次大戦前夜における包蓆の輸入代替化は、未だ種苗の輸入と試験の段階にあった。一方、ガニーバッグの輸入代替化は、関税保護政策と相俟って、台湾・日本の両地域で進められた。台湾では、1905 年 9 月、台中庁豊原に黄麻紡績工場が資本金 20 万円を以て設立された。当社の成績は良くなかったため、1912 年 12 月に解散し、資本金 200 万円の台湾製麻株式会社 (以下、台湾製麻と略) に改組された [帝国繊維株式会社台湾事業部 1946, 1-6]。台湾製麻は当初、島内産の黄麻を用いてガニーバッグの生産を画策したが、農家の黄麻製造法による品質の問題や生産量の不足のため、台湾

における黄麻の生産を奨励する一方、多くを海外、特に英領インドから輸入した [細田 1918, 23]。台湾産ガニーバッグの輸入代替化が進められても、その原料の多くは輸入に頼らざるを得なかったが、1912~16 年平均の台湾製麻におけるガニーバッグ生産量は約 100 万袋にのぼった [台湾総督府殖産局 1930, 68]<sup>(註14)</sup>。日本では、第一次大戦勃発以前に製麻工業の一定の発展が見られたが、多くは帝国製麻などを中心とした亜麻工業であり、ガニーバッグを生産する黄麻工業の会社は小泉合名会社だけであった [農商務省工務局 1922, 44]。小泉合名は 1890 年の創業<sup>(註15)</sup>で資本金は 15 万円、精紡機 722 錠、織機 40 台であったが、大戦前夜の 1913 年には精紡機 2196 錠、織機 95 台まで設備が拡張され、それに合わせて生産量も増大し [小泉製麻株式会社 1990, 16-17, 122]、黄麻工業における原料黄麻使用高は、1909 年は 6000 担であったが、1915 年には約 6 万担に至った [農商務大臣官房統計課 1923, 37]<sup>(註16)</sup>。

以上を踏まえ、各包装袋の供給比率を見てみよう。包装袋の重要性を示す数量的な尺度は 2 つあると考えられる。まず、包装袋の輸移入量及び生産量といった、包装袋それ自体に関係する数量的変化である。しかし、それ以上に重要なのは、「包装袋があることで、どれぐらいの商品を販売することができたのか」という点である。そして、「どれぐらい」とは、包装する商品ごとに単価が異なるため、包装する商品の販売量ではなく販売額でなければならない。そこで、米糖移出額と各包装袋がどれだけの額の砂糖及び米を包装したのかを示した表 1 を用いて、この点を考察しよう。1912~16 年平均の砂糖移出額は約 3180 万円、米移出額は 980 万

表1 米糖移出額（円）と袋別・地域別の包装比率（％）1912-1929年

米糖移出額	砂糖				米（e）	合計（f）
	含蜜糖（a）	直消糖（b）	原料糖（c）	白糖（d）		
1912-1916	2,135	13,389	14,651	1,604	9,775	41,554
1919-1923	2,125	52,740	31,738	12,462	21,625	120,689
1925-1929	151	59,778	36,747	16,218	61,127	174,021

包装比率	袋別		地域別			
	包蓆	ガニーバッグ	中国	インド	日本	台湾
1912-1916	76	24	76	9	7	7
1919-1923	56	44	56	14	19	11
1925-1929	9	91	9	44	36	11

（注1）米糖移出額は台湾総督府財務局（1936，491-493，504-507）。

（注2）原料糖移出額は，注1の史料および日本糖業連合会（1935）を用いて以下の方法で算出。

1927年まで：（原料糖使用量）÷（和蘭標本色相15号未満分蜜粗糖移出量）×（同，移出額）

1927年以降：（原料糖使用量）÷（和蘭標本色相15号，18号，21号未満分蜜粗糖移出量）×（同，移出額）

（注3）直消糖移出額は，注1の史料に記載の分蜜粗糖移出額から，注2で算出した原料糖移出額を差し引いて算出。

（注4）袋別包装比率の算出方法は次の通り。

1912-16年：包蓆は  $((a + b + c + d) \div f) \times 100$ ，ガニーバッグは  $(e \div f) \times 100$

1919-23年：包蓆は  $((a + b + d) \div f) \times 100$ ，ガニーバッグは  $((c + e) \div f) \times 100$

1925-29年：包蓆は  $((a + d) \div f) \times 100$ ，ガニーバッグは  $((b + c + e) \div f) \times 100$

（注5）地域別包装比率の算出方法は，次の通り。中国からは包蓆しか輸入しないため，袋別比率の包蓆と同率。インド・日本・台湾からはガニーバッグを輸入・生産しているため，3地域の合計は袋別比率のガニーバッグと同率。各地域の配分については，どの商品をごくから輸入・生産したガニーバッグで包装しているかは不明なため，台湾総督府財務局『台湾貿易年表』各年，台湾総督府殖産局（1930）に記載の輸移入量および台湾の生産量の比率で配分した。

円であった。これらの商品を包装した袋を種類別に見ると，砂糖を包装した包蓆は，米糖移出額の76パーセントを，米を包装したガニーバッグは米糖移出額の24パーセントを包装したことになる。地域別に見ると，包蓆はほぼ全て中国から輸入されていたため，中国は76パーセントを占める。一方，ガニーバッグは24パーセントを占め，インドからの輸入が9パーセントを占めた。日本からの移入は，輸入ガニーバッグに対する関税の影響を受けて，小泉合名会社で生産された品が移入され始めるようになり [台湾総督府財務局 1912，299]，7パーセントを占めるに至った。また，台湾からの供給は7パーセントであり，日本と合わせた帝国内自給率は14パーセントであった。ガ

ニーバッグが関税保護下にあっても，生産量の関係から，当該期の包装袋の自給率はそれほど高くなかったことが分かる。

以上から，当該期の包装袋供給は海外からの輸入が中心であり，地域別には中国との関係が強く，種類別では砂糖との関係が強かった包蓆を中心としていた。

## （2）1917～23年

図3を用いて，米糖移出量について確認しよう。当該期の米糖移出量は飛躍的に増大し，1912～16年の平均453万担から1919～23年平均の728万担へと増大した。同期間に，砂糖生産量は270万担から498万担へ増大し，1919～23年平均の各種砂糖移出量は，赤糖12万担，直消糖280万担，原料糖147万担，白糖

58万担であった〔台湾総督府財務局 1936, 504-507；山下 1932, 12〕。一方、米移出量は183万担から230万担へと1.3倍の増加に過ぎなかった。これらの商品に用いられた包装袋は次の通りである。包蓆は赤糖、直消糖、白糖の包装に用いられ、原料糖の包装はガニーバッグへと変更された（第Ⅲ節で詳述）。したがって、ガニーバッグは原料糖及び米の包装に用いられることとなる。包装袋輸移入量を見てみると、1912～16年平均の491万袋から1919～23年平均の830万袋へと増大した（図2）。種類別に見ると、同期間中、包蓆は砂糖増産の影響で250万袋から433万袋へ、ガニーバッグは原料糖包装が開始されたことを受けて241万袋から397万袋へ、ともに約1.7倍増大しており、前期と比べてバランスよく増大していることが分かる。

輸入代替化について考察しよう。包蓆については、台湾において原料となる蘭草の種苗の改良が続けられていた。当該期には、種苗試験地の集約化が図られ、総督府試験場、台中庁・嘉義庁農会、前田吉次郎農場、糖業試験場でのみ行われるようになった〔台湾総督府殖産局 1921, 4-5〕。しかし、1918年の総督府の史料によれば、「台湾に於ては砂糖及茶箱包装用として年々多量を輸入するか為め之を防かんとして原料竹仔の移植を試みたるも失敗に帰せり」とされており〔台湾総督府 1918, 73〕、別の史料にも「未だ之（蘭草）が栽培の運に至らず、或は遂に其の不可なるものあらんか」とあり〔東亜同文会 1918, 865〕、包蓆の輸入代替化は失敗したと認識されていた。一方、1919年の『台湾日日新報』によると、蘭草の栽培は成功したとされ、包蓆生産の問題は、広東省よりも工賃の

高い台湾において製織工程における機械化を図る必要性にあると指摘されている〔『台湾日日新報』1919a；1919b〕。この2つの見解について判断することは困難であるが、管見の限り、台湾総督府殖産局（1930）では包蓆生産の実態を確認できず、『台湾日日新報』（1930）において「輸入品に対し国産品皆無のもの」として包蓆が挙げられていること、織機の開発に成功するのは包装袋変更の議論が起こる直前の1922年であったこと〔『台湾日日新報』1922〕から、包蓆生産は当該期に失敗したと考えてよいだろう。一方、ガニーバッグの生産はどのように推移したのだろうか。台湾製麻は大戦中の需要増大を受けて1919年に能力を2倍に拡張する方針を決定し〔帝国繊維株式会社台湾事業部 1946, 14〕、1921年に完成した〔台湾総督府殖産局商工課 1935, 54〕。しかし、1920年から始まる戦後恐慌の影響により、「折角増設したる機械にも自から織った麻布を以て覆ふの惨状」となり〔帝国繊維株式会社台湾事業部 1946, 14〕、生産量も約80万袋にまで減少した〔台湾総督府殖産局 1930, 68〕。1922年以降再び増大して1923年によりやく230万袋となったが、1919～23年平均では130万袋であった〔台湾総督府殖産局 1930, 68〕。日本では、第一次大戦中の好況を受けて、1915年大阪に東洋製麻株式会社、1916年に尼崎に大阪製麻株式会社が設立されることとなった〔農商務省工務局 1922, 46〕。また、既存の小泉合名も1918年に資本金300万円の小泉製麻株式会社に改組するとともに、工場の増築を行い、精紡機3200錘、織機57台を増設して生産量の増大を図った〔小泉製麻株式会社 1990, 21〕。その結果、日本の製麻工業における原料黄麻使用高は、1915年の約6万担

から、1921年には約14万担へと、飛躍的に増大した〔農商務大臣官房統計課 1923, 37〕。

最後に表1を用いて、米糖移出額に占める各包装袋の包装比率を見てみよう。原料糖包装の変更の結果、包蓆は赤糖・直消糖・白糖の包装に用いられることとなり、米糖移出額の56パーセントにまで下落した。ガニーバッグは原料糖及び米の包装に用いられることで、米糖移出額の44パーセントを包装するに至った。地域別に見れば、中国56パーセント、インド14パーセント、日本19パーセント、台湾11パーセントとなっている。帝国内自給率は30パーセントまで上昇したものの依然として低く、中国から輸入される包蓆の重要性が依然として高い。

### (3) 1924～29年

当該期の米糖移出量は、1919～23年平均の728万担から1926～30年の1489万担へと飛躍的に増大した。同期間中、砂糖移出量は498万担から915万担へ増大している。増大の要因は、第1に、糖価の下落によって台湾糖業は生産性上昇の必要性に迫られたが、それが増産を伴ったこと〔平井 2007, 46〕、第2に、1927年の関税改正によって、日本市場で台湾糖と競合するジャワ糖の輸入量が激減したことである。1925～29年平均の各種砂糖移出量は、赤糖1万担、直消糖498万担、原料糖299万担、白糖115万担であった〔台湾総督府財務局 1936, 504-507; 山下 1932, 12〕。一方、当該期は米の移出量が飛躍的に拡大した時期でもあった。1918年の米騒動に代表される日本における米不足は、植民地における産米増産を要請し、台湾では1924年以降、移出を主目的とする蓬莱米の生産が活発化した。その結果、領台以後、

生産量の約15パーセント程度に過ぎなかった米移出量は、当該期に30パーセントを超えるまでに至り〔農林大臣官房統計課 1935, 50〕、1919～23年平均で230万担であった米移出量は、1925～29年平均で574万担へと増大した。

当該期の米糖移出に用いられた包装袋は次の通りである。包蓆は、赤糖・白糖の包装にのみ用いられ、ガニーバッグは米・原料糖の包装に加え、直消糖の包装も担うようになった。包装袋輸移入量は、1919～23年平均の830万袋から1926～30年平均の1476万袋へと増大した。種類別に見ると、同期間中、直消糖包装を失った包蓆は433万袋から257万袋まで急落し、代わってガニーバッグが397万袋から1219万袋へと急増した(図2)。

ガニーバッグ生産の推移について考察しよう。1924～25年における台湾製麻によるガニーバッグ生産量は約270万袋であり、順調に生産量を拡大していた〔台湾総督府殖産局 1930, 68〕。しかし、台湾製麻は、1926年5月の失火によって建物1200坪・機械108台が焼失したため、一時休業へ追い込まれた。1927年8月には早くも営業を再開することとなったが、火災の影響により資本金を140万円に減資しなければならず〔台湾総督府殖産局商工課 1935, 55〕、1928～29年における生産量は200万袋へと減少した〔台湾総督府殖産局 1930, 68〕。日本における生産は順調に拡大し、黄麻布(帆布除く)生産量は1922年の380万ヤードから1925年には730万ヤードへと増大した〔商工大臣官房統計課 1927, 27〕<sup>(註17)</sup>。

最後に表1を用いて、米糖移出額に占める各包装袋の包装比率を見てみよう。直消糖包装の変更の結果、包蓆は1700万円分の赤糖・白糖

の包装を担うだけとなり、米糖移出額の9パーセントを占めるに過ぎなくなった。一方、ガニーバッグは1億5757万円分という巨額の米・原料糖・直消糖の包装を担うに至り、米糖移出額の91パーセントを占めるに至った。地域別に見ると、中国が9パーセントへと急減した一方、インドは44パーセント、日本は36パーセントと急増し、台湾は11パーセントを供給した。特に帝国圏内の自給率が47パーセントにまで上昇した点は特筆すべきで、当該期は台湾米糖経済の地域間関係が決定的に変化した時期であると言える。

以上、台湾の包装袋貿易を輸入代替化と絡めつつ考察した。台湾で用いられる主要な包装袋は、2度の包装袋変更によって包蓆からガニーバッグへ移行し、輸入先は中国からインドへ移行した。一方、輸入代替化は、包蓆では失敗したが、ガニーバッグでは関税保護下の日本帝国内における生産量の増大と主要包装袋の変更に

よって、帝国内自給率は1920年代末には約半分を占めるまでに至った。

### III 包装袋変更の要因

#### 1. 包蓆の優位性

本節では、包装袋が変更されるに至った要因について検討するが、ここではまず、ガニーバッグが世界的に使用される中で、台湾で1920年代半ばまで包蓆が使用され続けてきた要因を考察しよう。

第1の要因は、台湾が包蓆産地の中国と近接しており、米糖生産が漢人によって行われたという、地理的・歴史的背景にある。表2は、中国海関統計に記載されている、台湾の「開港」期における包装袋輸入量を示したものである<sup>(註18)</sup>。表を見ると、当該期の台湾で用いられていた包装袋は包蓆・麻袋・ガニーバッグの3種類であったことが分かる。包蓆は輸出向け砂

表2 台湾の包装袋輸入量と1袋当たり輸入価格（海関両）1881-1895年

	麻袋		包蓆		ガニーバッグ	
	量	価格	量	価格	量	価格
1881	223,051	0.034	568,190	0.034	0	
1882	151,340	0.035	666,420	0.035	0	
1883	133,250	0.037	541,850	0.032	0	
1884	196,320	0.036	1,183,000	0.033	0	
1885	208,750	0.038	534,640	0.036	0	
1886	163,400	0.039	379,710	0.031	0	
1887	228,870	0.030	636,200	0.023	0	
1888	254,720	0.037	619,450	0.023	4,300	0.046
1889	184,900	0.035	503,195	0.027	0	
1890	251,700	0.034	547,300	0.032	8,000	0.037
1891	167,160	0.038	299,825	0.030	1,800	0.047
1892	153,700	0.038	489,950	0.025	0	
1893	236,907	0.040	315,000	0.026	0	
1894	144,788	0.053	727,090	0.024	0	
1895	124,400	0.058	454,050	0.026	0	

（出所）黄・林・翁（1997a；1997b）。



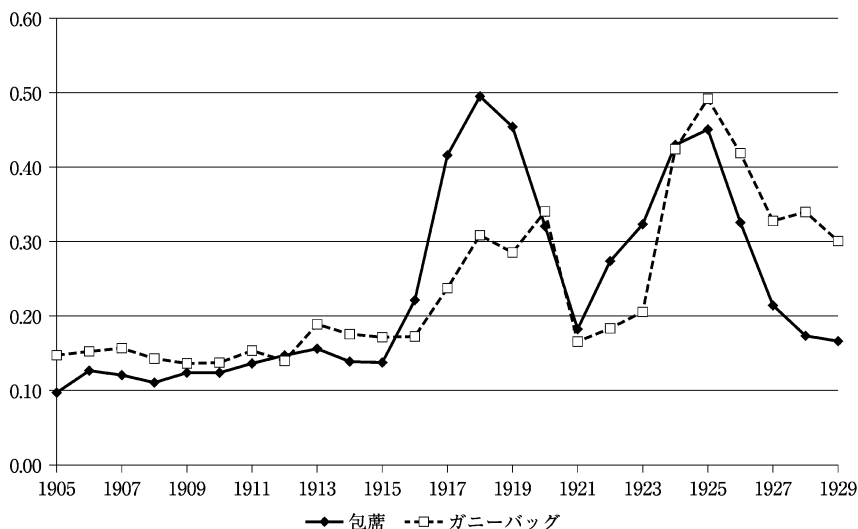
糖の包装用に、麻袋は中国向けの砂糖の包装用に用いられていたとされるが〔黄・林・翁 1997a, 総 141〕, 麻袋は次第に米の包装に用いられるようになった〔黄・林・翁 1997b, 総 1024〕。輸入量を見てみると、包蓆の輸入量が圧倒的に多く、ついで麻袋が多いことが分かる。一方、世界的に使用されるガニーバッグは 1880 年代末から 1890 年代初頭にかけて若干輸入されたのみで、ほとんど用いられていなかった。また、これらの包装袋貿易は外国商人ではなく、台南商人によって行われており〔黄・林・翁 1997a, 総 462〕, 台湾・中国間の強固な包装袋取引が窺える。

第 2 の要因は、価格である。表 2 からは、1888・1890・1891 年について、包蓆とガニーバッグ（中国産）の 1 袋当たり輸入価格を比較することができるが、これら 3 カ年の包蓆価格

は  $0.023 \cdot 0.032 \cdot 0.030$  海関両であるのに対し、ガニーバッグ価格は  $0.046 \cdot 0.037 \cdot 0.047$  海関両であり、包蓆の方が安価であることが分かる。次に、図 4 を用いて、日本植民地期における包蓆・ガニーバッグの 1 袋当たり価格を比較してみよう。図を見ると、第一次大戦期と 1920 年代の前半を除けば（この点については後述）、やはり包蓆価格の方が廉価であったことが読み取れよう。

第 3 の要因は、品質である。食品包装に限れば、包蓆はガニーバッグに比べて優位にあった。たとえば、1910 年代に本格的に生産が開始された原料糖は、当初はガニーバッグに包装されていたが、1914 年頃には包蓆による包装へと変更された。この理由について当時の史料では「従来原料糖の包装としてがんに一袋（ガニーバッグ）を使用したるものも荷痛みを虞れ本品

図 4 包蓆・ガニーバッグの 1 袋（100 斤入り）当たり輸入価格（円）の比較 1905-1929 年



(注) 価格は、『台湾貿易概覧』記載の輸入額を輸入量で割ったものを使用。包蓆は 100 斤入りなのに対し、ガニーバッグは 150 斤入りのため、ガニーバッグ価格は、輸入額を輸入量で割った後、100/150 を乗じた。

(包蓆)の使用を増加」[台湾總督府民政部財務局  
稅務課 1918, 257] させるに至ったとある。  
1924 年の直消糖包装變更に反対した多くの砂  
糖需要者は、この「荷痛み」がいかにして生じ  
るのかについて詳しく説明している。連合会第  
356 回協議会に提出された大阪糖業組合の請願  
書の内容を見ると、

「(連合会の) 不合理な決議は

①直費(直消糖)包装麻袋は毎年入梅以後  
は全国を通じて在庫品にぬれ、染めを生  
じ市場取引の核子たる受渡は事毎に紛憂  
を來たす。

②麻袋包装は倉庫の出入及汽車汽船積に際  
し必ず手鍵を使用し其結果破損目欠を生  
じ従って常に是等の責任及弁金負担問題  
に付て紛憂絶へず。

③地方への積出には全部縄掛の必要起り買  
主に費用負担を増さしむ。

④麻袋は直費向として非衛生的なるのみな  
らず菓子其他の製造に麻の小毛を混じ製  
品を粗悪にし及び仕上げに手数を要す。

(中略) 若し連合会に於て蜜ぬれ、染、無  
きを保証するか又は其場合其受渡上の責  
任を負担せらるるなれば兎も角之無以上  
依て起る紛憂は臆て全国の砂糖取引を破  
壊する」

というものであった[糖業連合会 1924d]。ここ  
からは、第 1 に、包蓆とのサイズの違いから來  
る問題が指摘されている(②)。すなわち、包  
蓆は 60 キロ入れであるのに対し、ガニーバ  
ッグは 90 キロ入れであり、包装袋變更に伴い、  
袋を担ぐのではなく手鍵を用いて引きずるよう  
になり、袋が破損することが指摘されている。  
また、第 361 回協議会に提出された、包装袋變

更の中止を求める岡崎市砂糖商組合の請願書に  
も、

「150 斤入詰麻袋は余り過重量にて遠隔の地  
亦は山間地への輸送困難なるのみならず品  
痛之欠斤等生しやすく且つ地方經濟にては  
取引不便を感じ可申亦取扱方も大会社等と  
其趣を異し徒弟婦女子の取扱多く主たる者  
は菓子製造に日も足らず活動致し居る」

とあり[糖業連合会 1924h]、消費地においては  
運搬上の問題はより深刻であった。第 2 は、袋  
自体の品質の問題であり(①, ④)、ガニーバ  
ッグの原料である黄麻は変色したり毛屑が混  
入したりすることがしばしば生じ、特に毛屑混  
入は多くの需要者に指摘されている。米がガ  
ニーバッグ包装であったのに対し、砂糖が包蓆  
包装であったのは、米が「研ぐ」という作業を  
通じて毛屑を除去できるのに対し、砂糖ではそ  
のようなことができなかったためであろう。こ  
のように、ガニーバッグは運搬コストを上昇さ  
せる点においても、包蓆よりも劣位にあった。

## 2. 砂糖包装袋變更の要因

では何故、砂糖の包装はガニーバッグへ變更  
されなければならなかったのであろうか。以下  
では、1916 年の原料糖包装と 1924 年の直消糖  
包装の變更要因を考察していく。

### (1) 1916 年の原料糖包装變更

1914 年に包蓆へ變更された原料糖包装は、  
再びガニーバッグへと移行した。『台湾貿易概  
覽』には、当該期の包蓆輸入の状況について、  
以下のように指摘している。

「(1916 年) 原産地広東省下にては前年大洪水  
の被害未だ癒えず産額減少し南北政争の騷  
乱は搬出の困難を來したるに尚ほ本島産糖

の増収に因り需要増加を気構え香港市価常に高調を保ち銀貨の騰貴と相俟って輸入を抑制し原料糖及消費糖に於てもがんに一袋使用の増加を見或は故包蓆を用ふるものあるに至り」[台湾総督府民政部財務局税務課 1918, 257]

「(1917 年) 産地広東省下の生産予想激減せるに基因し益々暴騰を呈し (1916 年) 年末には四十銭見当を唱ふるに至り愈々高気配なるより俄に補充品の買付に焦慮せる向ありしも品払底及相場高等の為取引捗々しからざりしか如く本年に入り輸入意外に多からず。又本年九月銀貨の奔騰に際しては相場愈々昂騰し島内六十銭以上を唱へ需要を控制し前年来の傾向たるがんに一囊使用を助長し原料糖の如きは殆んど本品の使用を見す。」[台湾総督府民政部財務局税務課 1919, 159]

「(1918 年) 本年期砂糖包装向輸入品の普通買約期たる前年八、九月頃には銀貨の奔騰と相俟って益々先高を予想せられたれば概して取引を急き前年十月以降入荷多かりし後を承け本年春季の輸入閑散に陥り又五、六月頃には産地広東省雷州地方に於ける擾乱險悪を加へ出回杜絶し香港在庫品も払底を来した」[台湾総督府財務局税務課 1921, 167]

これらの記述から、ガニーバッグ変更の要因は、供給力の問題とそれによる価格の上昇にあったことが分かる。当該期は台湾において砂糖生産量が増大した時期でもあった。従来、砂糖価格の維持を目的として、総督府によって製糖能力の使用制限措置が執られていたが、第一次大戦の影響で砂糖価格が上昇したことにより、1917

年にこの措置が撤廃されたため、砂糖生産量は飛躍的に増大し、1916/17 年期には約 760 万担という未曾有の生産量を記録するに至った。一方、同時期に広東省では洪水の発生によって包蓆原料の蘭草生産量が 1916・17 年の 2 年間減少した。また、中国における地方軍閥間の政争が 1916 年及び 1918 年に流通の杜絶をもたらした。特に 1918 年は生産量では回復したものの、流通杜絶によって、包蓆取引の中心地である香港で在庫が払底した。以上の需給逼迫によって、当該期に包蓆価格は急騰した。前掲図 4 からは、ガニーバッグよりも低廉であった包蓆の価格が、1916 年を境にガニーバッグ価格よりも高くなったことが読み取れる。ガニーバッグ価格も、大戦の影響による軍需品の影響で高騰したが [台湾総督府民政部財務局税務課 1918, 226], 包蓆価格の上昇に比べれば相対的に低かった。こうした市場の変化は、包蓆貿易商の活動にも影響を与え「湯浅三井等は大いに努力せるか如きも鈴木、サミュエル等は其の前途を危険視して進んで買契を求めざる」ようになり、「包糖材料の供給は糖界近来の一問題と」なった [台湾農友会 1916, 79]。

以上の包蓆市場の変化を受けて、各製糖会社は自発的に原料糖包装を包蓆からガニーバッグへと変更した。原料糖が選ばれた理由は、原料糖取引は生産者間の取引であり、包蓆・ガニーバッグ間の品質の差が消費者に直接影響することはなかったからであると思われる。その結果、需給逼迫は改善することとなる。1919~21 年の包蓆貿易について当時の史料では、

「(1919 年) 本年は銀高関係の不利存したるも動乱小康を保ち出回り順調に復し諸費緩和せる等にて相場漸落し (中略) (1920 年) 本

島の産糖額が前年に比し約百万担の大減退なりし上経済界の動揺に際会し直接消費糖の売行宜しからず原料糖を増産せるに連れがんに一袋の使用高を増加し（中略）持越品潤沢なりし」〔台湾総督府税務課 1923, 172〕

「(1921 年) 糖価の暴落に依り内地に於ける白糖（精製糖）の需要盛にして原料糖の移出活況を呈しがんに一袋の使用多く（中略）本年の輸入激退を来せり」〔台湾総督府税務課 1924, 187-188〕

とある。すなわち、供給側の広東では政争の一時的収束によって生産量が增大し（1919 年）、需要側である台湾の砂糖生産量でも、原料糖需要の増加による直消糖需要の相対的減少に連れて、包蓆需要が相対的に減少した（1920, 1921 年）。その結果、需給逼迫は改善され、1919～21 年における包蓆・ガニーバッグ間の価格差は収束に向かったのである（前掲図 4）。

#### (2) 1924 年の直消糖包装変更

しかし、1922 年以降、再び包蓆需給は逼迫した。当該期の『台湾貿易概覧』には、以下のような記述がある。

「(1922 年) 産糖高か希有の巨額に達し（中略）相場は前年末各社在庫品の払底に傾きたる為年初二十五円五十銭の高値を現し、二、三月の交香港に於ける海員大罷業に阻けられ本品の入津殆と杜絶の姿なりしを以て砂糖の増産と相応して相場を沸騰せしめ三十一、二円を唱へ罷業の解決と共に下押し後産地収穫減少説に刺激せられ漸騰」〔台湾総督府税務課 1924, 188〕

「(1923 年) 高雄市況は本品が広東省政情の不安にて兎角出廻り薄を告げ勝なる一方両三

年来本島産糖の漸増に伴ひ需要進捗の傾向を呈せる為年初の二十九円処より漸騰歩調を辿りつつありしが来期糖が著しく増産を予想せられ各製糖会社の買付旺盛なりしと産地雷州地方が動乱にて二割減産を報じ供給不足なり」〔台湾総督府税務課 1925, 156〕

「砂糖は輸移出以上の盛況を告げ本品亦入増すへかりしも前年（1923 年）産地雷州の作柄不良にして製品粗悪減産を来し価格の暴騰甚しく糖業者は之か仕入に不少困難」〔台湾総督府税関 1926, 162〕

1920 年代における砂糖価格の下落による砂糖消費量の増大を受けて、台湾では年々生産量が增大し、1922～23 年の台湾糖移出量は平均 415 万担にのぼった。一方、包蓆供給量は、広東における生産量の減少（1922 年）および広東・香港における政情の不安定（1922, 1923 年）によって減少し、1922～23 年の拱北からの包蓆輸出量は平均 352 万袋であったことから〔CIMC〕、供給不足は深刻であったと言える。価格面からも当時の状況を窺うことができる。前掲図 4 を見ると、1920～21 年に収束した包蓆・ガニーバッグ間の価格差が、1922 年以降、再び開き始めることが読み取れよう。

ただし、1925 年以降、包蓆価格は再びガニーバッグ価格を下回るようになった（前掲図 4）。こうした事実と砂糖需要者からの包装変更に対する反対の声にもかかわらず、直消糖包装が包蓆へ再変更されることはなく、連合会では議題にすら上っていないことから、価格の問題は副次的なものであったと捉えることができる。そこで、実際に包蓆調達に当たっていた流通主体の史料を用いて、さらに考察していこう。1924 年 6 月の連合会第 352 回協議会に、各製

糖会社の営業担当者で構成される水曜会から、「台湾分蜜糖包装用としてガンニー袋使用の件」と題する請願書が提出された。この請願書が1924年の包装変更問題を引き起こすのであるが、そこでは

「支那政情不安定に依り常に産地安平の蒐集に困難を生じ為めに輸入途絶の事往々有之候処殊に昨年より本年に掛けては産地甚だ不作にして品質頗る劣等為めに包装の不体裁は固より中味脱漏を来し（中略）斯かる状態依然たるに於ては作業場の不安常に絶えざる次第なれば今日に於て其の調節方法に就き考究し安平（包蓆）の使用量を可成減少して平時在荷の潤沢を計り併せて品質の選択を行ふ事最も肝要の事と存候、之れには台湾分蜜糖の包装用としてガンニー袋を使用し其の所用数量に相当する安平の使用を減少」〔糖業連合会 1924a〕

するべきだと指摘されている。また、包装袋変更から2年後の1926年、三井物産の包蓆取引を担当していた台南支店長が支店長会議で提出した「参考資料」には、

「台湾分蜜糖の包装材料を麻袋に変更して以来本品需要著しく減退し僅に耕地白糖及び車糖の包装にアンペラを使用せるに止まり（中略）産地の現況を見るに南支一帯殊に雷州半島の地打続く動乱に耕地多く荒廃に帰し農民又植付を怠れる結果は産額の激減を来し品位の低下著しきものあり。若し夫れ麻袋使用の事なかりせば供給は到底需要を充たす能はず相場の変騰以外各製糖会社の困憊は全く想像に余りあるべく我糖業連合会が糖商団の囂々たる反対意見に顧みる事なく包装変更の決議を取てしたる果断は誠

に敬服に堪えず」〔三井物産台南支店長 1926, 127-128〕

とある。さらに製糖業の業界雑誌『糖業』では、「本期より台湾分蜜糖に包蓆使用を禁じたので左なきだに産地雷州は包装上物の最大得意を失いたる打撃は頗る甚大なるものがあるので雷州産地仲買組合香港包蓆輸出業者の同業組合は寄々協議の結果並に雷州に於ける包装仲買組合を連絡を取り第一品質の昂上を図る事に重を置き其の結果として今後半箇年乃至一箇年間は粗製品を輸出せざる前提として供給の限定を断定するに決し（中略）両組合は糖業連合会なり我が糖商団に対して日本製出の砂糖包装用に包蓆使用の復活を運動する計画なるが本期より台湾糖が包蓆使用を厳禁したるは産地雷州に対して痛く打撃を与へたるものと推察さるるが糖業連合会が包蓆を廃止したるは品質の粗悪となりたるも確かに一つの原因なるも随時随所にて購入出来ざる一点が最も有力なる理由であったから果して仲買組合及び香港包蓆商の運動其の効を奏するや否やは目下の処一寸疑問とされて居る」〔台湾糖業研究所 1925, 39-40〕

とある。これらの史料における言及で特に注目したいのは、包蓆価格の問題がほとんど指摘されない一方で、第1に包蓆の品質の低下が指摘されていることである。上述したように、包蓆がガンニーバッグに対して有していた優位性の1つは、砂糖の品質を維持する機能であった。しかし、政情不安の中で耕作地が荒廃した結果、包蓆の品質が低下し、砂糖が漏れる事態を招いた。当該期には、品質の面で包蓆はガンニーバッグに対する優位性を失ったのである。ただし、

『糖業』が指摘するように、1925年に香港において品質改善運動が展開されて以降も包蓆需要が増大しなかったことを考えれば、品質の問題も副次的なものであったとすることができる。包装袋が変更された最大の要因は、第2に指摘されている、供給能力の問題にあった。水曜会は中国における政情の悪化が産地における包蓆の集荷を困難にさせていること、三井物産台南支店長は包蓆の供給量は需要量に全く追いついてないこと、『糖業』の記事は包蓆の供給範囲に限界があることを指摘している。図1で示したように、包蓆の供給範囲は中国国内を除けば、かなり限定されており、さらに1910年代から1922年における供給量は、少ない年で約600万袋、多い年でも約800万袋であった。他方で、台湾における砂糖生産量は年々増大し、1920年代には約600万担（包蓆600万袋が必要）以上をキープするようになった。直消糖包装をガニーバッグへ変更することなくしては、当該期の台湾糖移出は不可能となっていたのである。

## おわりに ——結論——

本稿では台湾の米糖移出経済をめぐる対外関係を包装袋貿易という視点から考察した結果、以下の点が明らかとなった。第1に、米糖の対日移出は包装袋の対アジア経済圏輸入によって支えられていたということである。日本帝国経済圏の最大の問題がいかに正貨流出を抑制するかにあったことに異論はないだろう。台湾は日本の「食糧原料基地」と化すことで、米糖移出量を飛躍的に増大させ、日本の正貨流出を防ぐ大きな要因となった。従来の研究では、米糖生

産がどのようにして増大したかに焦点が当てられ、「生産＝移出」は暗黙の前提とされてきた。しかし、生産が移出につながるには、包装袋が安定的に供給される必要がある。その包装袋は、植民地化以前から用いられていた包蓆および植民地化後に使用が開始されたガニーバッグであった。日本帝国圏内におけるこれら包装袋の生産は、包蓆は大戦期には頓挫したものの、ガニーバッグは日本からの移入や台湾での供給が開始されたことを受けて増大し、大戦期に14パーセントに過ぎなかった自給率は、1920年代後半には約半分を占めるまでに至った。こうして見ると、包装袋は輸入代替化に成功したと言えるかもしれない。しかし、仮にそうだととしても、それは「保護関税→国内生産量の増大→自給率の上昇」という定式に主要包装袋の変更という「不測」の事態が加わることで可能であったし、さらにガニーバッグの原料である黄麻の多くはインドから輸入されていた<sup>(註19)</sup>。1930年代に米用のガニーバッグをインドでは生産されない100斤入りガニーバッグへ変更し、1934年以降、稲作から黄麻作への作付転換を奨励する動きが見られたが、砂糖用ガニーバッグの多くは、原料黄麻も含めて海外からの輸入に依存し続けねばならず、輸入代替化は成功したとは言えない<sup>(註20)</sup>。したがって、外貨流出を抑制するための米糖輸入代替化は、海外からの包装袋供給に依存しなかった<sup>(註21)</sup>。先行研究は、輸入について、その多くが次第に移出に代替されるか、または帝国内では自給できない物資を補給するにすぎないと指摘するにとどまり、積極的な意味づけを与えることはなかった。たしかに、包装袋輸入額は全輪移入額の数パーセントを占めるに過ぎない。しかし、

たった数パーセントをしめるに過ぎない包装袋輸入が日本帝国経済の米糖輸入代替化を可能としていたのである<sup>(註22)</sup>。こうしたことは、移出入と輸出入を横断的に考察することなしには明らかにできなかった。

この点は、本稿が解明した第2の点である、主要な砂糖包装袋が中国産包蓆からインド産ガニーバッグへ移行した要因に如実に示されている。当初は圧倒的に移出量の多い砂糖の包装に用いられる包蓆の重要性が高かったが、大戦期に原料糖包装がガニーバッグに変更され、1924年には蓬莱米移出の増大及び直消糖包装のガニーバッグへの変更を受けて、包蓆は米糖移出の9パーセント（約1700万円分）を担うまでに低下し、ガニーバッグは米糖移出の91パーセント（約1億5757万円）を担うまでに上昇した。1930年代に入ってもガニーバッグの重要性はさらに増大し、台湾市場を失った雷州産包蓆の輸出量は停滞したままであった<sup>(註23)</sup>。包装袋が変更された要因には品質の低下や価格の上昇など包蓆の優位性が消失したことが挙げられるが、それは一時的なものに過ぎない。より長期的かつ決定的な要因は、農村手工業下での包蓆の生産量の増大を上回る速度で台湾の砂糖生産量が増大したことで、包装袋の安定的確保が困難となったことにあった。製糖会社の利益の源泉は、包装袋取引にあるのではなく、それを用いて包装した砂糖の販売にある。製糖工程を滞らせないためにも、包装袋は、なによりも安定的に調達される必要があったのである。したがって、包装袋が包蓆からガニーバッグへ移行したことは、単に供給元的地域的な移行を意味するのではなく、世界レベルで流通する包装袋の供給に支えられることで砂糖移出量のさらなる増大が可

能となったことを意味しているのである。このことは、当該期の台湾糖業を取り巻く環境を考えた場合、さらに重要となる。1920年代のアジアの砂糖市場は、砂糖価格の暴落と安価なジャワ糖の思惑も絡んだ取引の急拡大によって、第一次大戦期までのそれとは様相を異にした。その影響は日本帝国内貿易にもおよび、日本市場には必要以上にジャワ糖が輸入され、日本帝国内貿易は動揺するようになったのである。こうした問題に対して、台湾糖業が単位面積当たりの生産性の向上を図り安価な砂糖を大量に移出することで対抗したこと、それがアジアにおける砂糖流通にまで変化をもたらしたことは別稿で指摘したとおりであるが〔平井 2007, 46-47〕、包装袋の変更による台湾糖移出制約の解消は、これら一連の流れを可能としていたのである。「砂糖」という当該期のアジアにおける代表的な貿易商品から見れば、包装袋変更は、日本帝国経済圏が、その内部の紐帯を強化し、アジア経済圏への対抗をさらに強めていこうとする一助となったと言えるのではないだろうか。

本稿での考察によって、台湾経済にとってアジア経済圏との関係が重要であったことは明らかにできたであろう。ただし、両者の関係の一端を示したに過ぎず、今後、さらなる事例の積み重ねが必要となる。

（注1）アジア経済をどのようにとらえるかについて、アジア全体を1つの経済圏と捉える杉原薫の「アジア間貿易論」と、日本帝国圏を1つの経済圏と捉え、それ以外の地域に「アジア的」なものはないと捉える堀和生の「東アジア資本主義史論」がある〔杉原 1996；堀 2008〕。本稿での捉えかたは、これらの折衷型である。

(注2) 游 (2006, 42) も「台灣輸出商品以米, 砂糖, 茶葉為大宗, 因此輸入物品也此三種商品相關用品比例為最多, 如麻布袋, 茶箱板, 包蓆與鉛塊等」として, 包装袋の重要性を指摘している。しかし, 包装袋そのものを考察対象としていない。

(注3) また, 今津健治は「商品の荷造はたんに商品の輸送中の保護にとどまらず, 一定の量目をもった取引単位としても機能し, 荷為替, 保険, 通関業務などの円滑化に寄与することになる。したがって, 一定の量目をもった包装袋を量産することは, 商標などとともに商業信用上の重要な課題である」とする [今津 1986, 201]。

(注4) たとえば, 商工省商務局貿易課 (1926-32) は, 包装改善を目指すための調査・講演内容が掲載された, 全15輯にわたる調査記録であり, そこからは包装の質が国際競争力を左右する重要な要因であったことが看取できる。

(注5) 包蓆は藺草を原料として製織した製品であり, 「蓆」, 「草蓆」, 「アンペラ」など, 様々な呼称がある。英名は “mats” である [忍頂寺 1918, 16]。

(注6) ジュート製品は大きく “gunny” と “hessian” に分類でき, 「ガンニーは下等ジュートを原料とせる太き糸を持って製織したるものにして, ヘツシヤンとは上等のジュートを原料とせる細き糸を以て織りたる布を云ふ。而して前者は更に袋の形にされて輸出し後者は多く布の儘にて輸出される」という違いがあった [商工省商務局貿易課 1925, 58]。本稿では主に前者を扱うため, 「ガニーバッグ」で統一する。

(注7) 製糖会社の総コストに占める包装費の比率を正確に知ることはできないが, 包装費が含まれる「製造費」の比率は, 総コストの約10パーセントである [台湾総督府殖産局特産課 1936, 7]。「製造費」にはそのほか燃料費・油脂薬品代, 修繕材料費が含まれる [日本銀行調査局 1921, 34]。

(注8) ただし, 19世紀中葉の「開港」以後, 欧米市場向けに烏龍茶や樟脳が輸出されるよう

になり, とりわけ烏龍茶は19世紀末から20世紀初頭にかけて, 輸移出額の首位となるまでに増大した。

(注9) 直消糖とは, 直接消費される分蜜粗糖の総称である。

(注10) たとえば1920年における台湾のガニーバッグ輸入について「本品の欧州方面輸出の精糖包装に使用せられたるもの著しき巨額に昇りたるが此等は全部私設仮置場の取扱に係り輸入関係を有せざりしものとす」とある [台湾総督府税務課 1923, 146]。ただし, 台湾においては大战期を除いて輸出は少なく, 輸出品が多岐にわたる日本において顕著であったと考えられる。

(注11) 澳門を経由した理由として, 第1に, 澳門のほうが倉庫料などの経費が安価であったこと, 第2に, 雷州・澳門商人間の金融関係が強固であったこと, 第3に, 慣習上の点で澳門を経由することでトラブルを低減していたことが挙げられる [忍頂寺 1918, 23]。第一次大战による包蓆価格の上昇の中で, 香港商人が, 産地との直接取引を試みるようになったが, 「原産地取扱業者並に澳門商人によりて烈しき妨害を被り, 直接買入れ継続をなすに堪へざるに至りたるのみならず, 遂に原産地同業組合は雷州斯業商人以外に一切販売せずとの規定を設け澳門商人の利益を保存せんとの協議をさへなすに至れり, 故に今香港商人は依然原産地製造者と取引すること能はざるの状態にあり, 専ら従前の如く澳門商人の手を経て輸入するを通例とすることとなった [東亜同文会 1918, 953]。

(注12) banian とは, ヒンドゥー教徒の商人の意である。

(注13) 原料糖とは, 精製糖の原料に用いられる分蜜粗糖を指す。

(注14) 原表の数字は150斤入りであるが, 包蓆との統一を図るため, 1.5を乗じて, 100斤入りベースでの表記とした。以下, 台湾製麻の生産量はこの通りとする。

(注15) ただし, 創業時の名称は都賀浜麻布会社であり, 1893年以降, 小泉合名となる。



(注16) 管見の限り、日本におけるガニーバッグ生産量を知る統計はなく、生産量の推移は『農商務統計表』の黄麻原料使用高の推移で代替せざるを得ない。ただし、この数字には帆布生産の原料となる黄麻も含まれるという問題がある。

(注17) 『農商務統計表』は1922年を境に「黄麻原料使用高」の項目が消滅し、新たに「黄麻布」の項目(生産量(ヤード)、生産額)が登場する。これは後継史料である『商工省統計表』にも用いられる。しかし、1926年以降は生産額のみが記載され生産量の記載は消滅する。

(注18) 海関統計における包蓆の名称は時代によって異なる。1880年までは“Mats, of all kinds”, “Mats”と記載されており、包蓆とともに花筵も含まれていると考えられる。袋のみの記載となるのは、1881年以降の“Bags, Mat and Straw”(1881~86年)、“Bags, Grass and Straw”(1887~95年)からであり、ここでは1881~95年について考察する。

(注19) 1933年の台湾製麻における使用原料黄麻455万斤の内訳は、インド産310万斤、中国産50万斤、台湾産95万斤であった[台湾総督府殖産局商工課 1935, 170]。

(注20) 1933年の台湾製麻のガニーバッグ生産量約293万袋の内、米用256万袋に対して、砂糖用は37万袋に過ぎない[台湾総督府殖産局商工課 1935, 182]。

(注21) 1930年代に入ると、黄麻やガニーバッグの輸入は、砂糖の安定的な移出にとって問題視されるようになる[『台湾時報』1933; 『台湾日日新報』1936]。

(注22) したがって、包装袋の輸入代替化が行われたことの意義は、包装袋輸入による外貨流出の抑制にあるわけではなく、米糖輸入代替化による外貨流出の抑制を確実に行うこと(海外供給という相対的に高い不確実性を除去すること)にあったと言える。

(注23) 包蓆全体の輸出量は増大しているが、それは広東や九龍から香港への茶・生糸用包蓆の輸出量が増大したからであり、拱北から澳門

への砂糖用包蓆の輸出量は急減している[CIMC 1931]。

## 文献リスト

### 〈日本語文献〉

- 今津健治 1986. 「輸出工産物の技術的課題」角山栄編『日本領事報告の研究』同文館所収。
- 大豆生田稔 1993. 『近代日本の食糧政策——対外依存米穀供給構造の変容——』ミネルヴァ書房。
- 外務省通商局 1923. 『在広東帝国領事館管轄区域内事情』。
- 亀井英之助 1914. 『砂糖取引事情の概要』拓殖新報社。
- 河原林直人 2003. 『近代アジアと台湾——台湾茶業の歴史的展開——』世界思想社。
- 久保文克編著 2009. 『近代製糖業の発展と糖業連合会——競争を基調とした協調の模索——』日本経済評論社。
- 小泉製麻株式会社 1990. 『小泉製麻百年のあゆみ』小泉製麻株式会社。
- 芝崎勲・横山理雄 1993. 『新版食品包装講座』日報出版。
- 商工省商務局貿易課 1925. 『英領印度に於ける「ジュート」並に同製品』。
- 1926-32. 『輸出品包装改善に関する調査』。
- 商工大臣官房統計課 1927. 『第2次(大正14年)商工省統計表』。
- 杉原薫 1996. 『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房。
- 台湾銀行調査課 1922. 『米に関する調査』。
- 『台湾時報』1933. 「台湾に黄麻栽培奨励を提唱す」9月号。
- 台湾総督府 1918. 『福建、広東両省に於ける各種産業の実況』。
- 台湾総督府財務局『台湾貿易年表』各年。
- 1912. 『明治42年台湾貿易概覧』。
- 1936. 『台湾貿易四十年表』。
- 台湾総督府財務局税務課 1921. 『大正7年台湾貿易概覧』。

- 台湾総督府殖産局 1921.『台湾包蓆草栽培要説』。  
 —— 1930.『台湾商工統計昭和3年版』。  
 台湾総督府殖産局商工課 1935.『熱帯産業調査書  
 (上)工業に関する事項』。  
 台湾総督府殖産局特産課 1936.『台湾糖業要覧昭和  
 10年期』。  
 台湾総督府税関 1926.『大正13年台湾貿易概覧』。  
 台湾総督府税務課 1923.『大正8-9年台湾貿易  
 概覧』。  
 —— 1924.『大正10-11年台湾貿易概覧』。  
 —— 1925.『大正12年台湾貿易概覧』。  
 台湾総督府民政部財務局税務課 1918.『大正元-  
 5年台湾貿易概覧』。  
 —— 1919.『大正6年台湾貿易概覧』。  
 『台湾日日新報』1919a.「包蓆草苗養成——本年度  
 より実行——」4月17日。  
 —— 1919b.「アンペラ草の栽培」4月24日。  
 —— 1922.「砂糖笈包用のアンペラ織機が発明  
 された」7月20日。  
 —— 1930.「本島の重要輸入品と国産品の関係」  
 7月23日。  
 —— 1936.「黄麻の生産は積極的なれ——外国  
 黄麻輸入は国策に悖る——」7月10日。  
 台湾糖業研究所 1925.『糖業』(1月)。  
 台湾農友会 1912.『台湾農事報』第66号(5月)。  
 —— 1914.『台湾農事報』第87号(2月)。  
 —— 1916.『台湾農事報』第108号(9月)。  
 帝国纖維株式会社台湾事業部 1946.『豊原廠四十  
 年之回顧——台湾製麻会社を語る——』。  
 東亜同文会 1918.『支那省別全誌 第一卷 広東  
 省附香港澳門』。  
 糖業連合会 1924a.『第352回協議会議案』6月  
 20日。  
 —— 1924b.『第354回協議会議案』7月14日。  
 —— 1924c.『第355回協議会議案』7月25日。  
 —— 1924d.『第356回協議会議案』8月8日。  
 —— 1924e.『第357回協議会議案』8月22日。  
 —— 1924f.『第358回協議会議案』9月12日。  
 —— 1924g.『第359回協議会議案』9月26日。  
 —— 1924h.『第361回協議会議案』11月10日。  
 —— 1925a.『第372回協議会議案』5月15日。  
 —— 1925b.『第374回協議会議案』6月5日。  
 —— 1925c.『第375回協議会議案』8月7日。  
 —— 1925d.『第376回協議会議案』9月4日。  
 —— 1925e.『第378回協議会議案』10月23日。  
 東洋経済新報社 1935.『日本貿易精覧』東洋経済  
 新報社。  
 仲摩照久編 1931.『日本地理風俗体系 第15巻  
 台湾編』新光社。  
 日本銀行調査局 1921.『砂糖取引状況』。  
 日本糖業連合会 1935.『内地精製糖製造高及引取  
 高表』。  
 忍頂寺誠一 1918.「南支那に於けるアンペラ」神  
 戸高等商業学校『大正7年夏期海外旅行調査  
 報告』。  
 農商務大臣官房統計課 1923.『第38次(大正10  
 年)農商務統計表 第2編』。  
 農商務省工務局 1922.『主要工業概覧：第一部織  
 維工業』。  
 農林大臣官房統計課 1935.『昭和9年米統計表』。  
 平井健介 2007.「1900~1920年代東アジアにお  
 ける砂糖貿易と台湾糖」『社会経済史学』73(1)  
 (5月)。  
 細田勝次郎 1918.『台湾に於ける黄麻』台湾総督  
 府農事試験場。  
 堀和生編著 2008.『東アジア資本主義史論Ⅱ——  
 構造と特質——』ミネルヴァ書房。  
 堀和生著 2009.『東アジア資本主義史論Ⅰ——形  
 成・構造・展開——』ミネルヴァ書房。  
 松浦章 2003.「日本統治時代台湾における包種茶  
 の海外販路」京都女子大学東洋史研究室編  
 『東アジア海洋域圏の史的研究』京都女子大学。  
 三井物産『事業報告書』(三井文庫所蔵,物産  
 615)。  
 三井物産 1920.『Juteの産地並に需要地事情』。  
 三井物産台南支店 1926.『支店長会議参考資料』  
 (三井文庫所蔵,物産352-3)。  
 三井物産台南支店長 1926.『支店長会議参考資料』  
 (三井文庫所蔵,物産387)。  
 三井物産大連支店伊達正男 1921.『黄麻,麻袋,  
 麻布産地事情』。  
 三井物産香港支店長 1926.『大正15年度支店長会

議資料』(三井文庫所蔵, 物産 388).

山下久四郎編 1932.『砂糖年鑑昭和 6 年度』日本砂糖協会.

林満紅 1997.『台湾海峡兩岸經濟交流史』交流協会.

〈中国語文献〉

陳基 1965.「雷州蒲苞業的一些史料」『廣東文史資料』第 21 輯.

黃富三・林満紅・翁佳音 1997a.『清末台灣海關歷年資料 (I)』台北 中央研究院台灣史研究所.  
—— 1997b.『清末台灣海關歷年資料 (II)』台北 中央研究院台灣史研究所.

許世融 2005.『關稅與兩岸貿易 1895~1945』國立台灣師範大學博士論文.

游棋竹 2006.『台灣對外貿易與產業發展之研究 (1897~1942)』台北 稻鄉出版社.

〈英語文献〉

CIMC (China. Imperial Maritime Customs), *Analysis of Foreign Trade: Exports*. 1902-1931.

DCISI (Department of Commercial Intelligence and Statistics, India), *Review of the Trade of India*. Calcutta, Government of India Central Publication Branch. 1907-1925.

【付記】本稿は, アジア国際經濟史研究会 (2008 年 9 月 30 日, 於松山大学) での報告内容を加筆・修正したものである。当日コメントしてくださった研究会の参加者および匿名の査読者に感謝申し上げたい。また, 本稿の準備・執筆段階において研究の場を提供してくださった中華民国中央研究院近代史研究所, とりわけ懇切丁寧に指導・助言してくださった林満紅教授にも感謝申し上げる。

(慶應義塾大学大学院經濟学研究科博士課程, 2009 年 4 月 15 日受領, 2010 年 5 月 24 日, レフェリーの審査を経て掲載決定)